

あの白い

登場人物 女1

女2

女3

女4

女5

女6

OLが二人、会社の休憩室で休憩している。

女1 私さ、本当はコーヒー飲めないんだよね。

女2 じゃあなんで買ったんだ。

女1 コーヒーの匂い嗅ぐとき、OLの私が、会社の休憩室で休憩してる時の事思い出すんだよね。

女2 は？

女1 懐かしい気持ちになるんだ。

女2 あんた今OLじゃん。

女1 私さ、

女2 うん。

女1 ホントは八十のおばあちゃん、今はコーヒー飲んでるだけなの。

女2 は…？

女1 コーヒーの匂い嗅ぐときの景色思い出すのよ。

女2 …。

女1 懐かしくて泣きそうになる。

女2 八十のあんたが？

女1 うん。私もうすぐ死ぬと思う。

女2 それはなんかごめん、死ぬ間際に思い出した景色に私が居て。

女1 うん、でもそこまで間際じゃないと思うから大丈夫。

女2 あ、そう。

女1 うん。

女2 そういうのなんて言うんだっけ？なんとかって言うんだよね、なんだっけ？特定の匂いを嗅ぐとそれに関連した記憶がよびさまされるって言う。

女1 ふーん。

女2 プルースト効果。

女1 へえー。

女2 全然興味無いんだね。

女1 もう横文字出てくるとダメだわ。

女2 つまり今これは、あなたの記憶のシーンで、それを思い出してるだけって事ね。

女1 そうなんだけど、でも今まで生きて来てOLなんかやった事ないのね私、飲食店しかないから。だから完全に想像でしかないの。なのに懐かしいって気持ちになってる、なんだとっつコレ。

女2 うーんと、それはちよっと困った事になってるね。

女1 まあそこまで困ってはいないんだけどね。

女2 あんたじゃなくて私が。

女1 え？

女2 あなたの想像のシーンに出ている私は一体なんなんだって話になるじゃん。

女1 ああ、確かにね。

女2 なに？私は、あなたの、創り出した、想像上の人物って事？

女1 いや、違うと思う。だって見た事ある顔だもん、名前はわかんないけど。きっと、どこかで会って、それがたまたまなんかのきっかけで出て来てるんだと思う。

女2 意外と冷静なのねその辺…。

女1 夢とかってそういうもんじゃない？

女2 まあね、わからないでもないよ、私もよく夕立の後の、夏で、あの湿ったアスファルトの匂いとか嗅ぐと、小学生の頃の通学路が出てくるもん。

女1 へえー。

女2 それもなんでかわかんないんだけどね、特に何か思い出があるって訳でもないし。こう、道があるって、振り返ると夕陽が射しこんでて、周りには私以外誰も居なくて…でもそれがいつでどの記憶なのか全然覚えてないんだけどね。

女1 景色だけが鮮明なの？

女2 そう。こつちに萩原くんて子の家があつて、その隣が喫茶店で、キャプテンで名前だったかな
女1 喫茶店でキャプテン？面白い名前
女2 こつち側はアパートで、その曲がり角のところに倉庫みたいな駄菓子屋さんがあつてさ、

女3、やつてくる。

女3 キャップテンだよアレ。
女2 え、キャップテン？
女3 小さい「ツ」が入ってるでしょお。
女2 あ、ホントだ！
女3 キャップが十個あるからキャップテンじゃないかつてママが言つてた。
女2 キャップつて？
女3 ペンの。
女2 ペンのキャップだけが十個もあつてもしょうがないじゃん。
女3 そうか。
女2 帽子の事じゃないの？
女3 え、ちよつと意味わかんない。
女2 なんでよ。
女3 ねえねえさくらんぼ買つてこ。
女2 あ、うん！
女3 あたし今日で全種類制覇するー！
女2 でもアレつてどれもおんなじ味だよね。
女3 え、そんな事ないよ。
女2 おんなじ味だよ。
女3 さくらんぼはさくらんぼの味するし青りんごは青りんごの味するし、
女2 しないよ。
女3 え、するよ微妙に。
女2 微妙じゃ意味ないじゃん。
女3 すわろー。

女2 うん。
女3 おいし。
女2 おいしいね、何味かわかんないけど。
女3 あたしさ、好きな子できた。
女2 え、誰？
女3 同じクラスなんだけどね。
女2 もしかしてマイケル？
女3 うん…。
女2 やっぱりな、そうだと思つた。
女3 え、あんたもマイケル？
女2 な訳ないじゃん、
女3 良かった。
女2 だつてあいつなんかクセーもん。
女3 違ふ、あれは香水つけてるんだよ。
女2 小六で香水なんかつけてる男ダメだよ、やめときなよ。
女3 お父さんのだよ多分。
女2 ああ、そうだそうだ、お父さんの臭いがするんだあいつ。
女3 じゃあいいじゃん。
女2 でも小六でお父さんの臭いしてる奴はダメだつて絶対。
女3 じゃあ香水つけるのやめてつて言ふ。
女2 言える？
女3 うーん…。
女2 言える訳ないじゃん。だつて良い匂いだつて思つてんだよマイケルは。
女3 うん…。
女2 お前クセーよつて言つてるようなもんじゃん。
女3 つけすぎなんだよね…。
女2 体臭、まかす為につけてんだよ、あいつちゃんと風呂入つてんのかなあ。
女3 入つてるよ、だつて髪の毛とかサラサラだもん。
女2 なんかいろんな臭いが混ざり合つてクセーんだな。

女3 臭い臭い言わんといてよもお…。

女2 課長の新井田ってあんな臭いするよね。

女3 課長？

女2 うん。

女3 ん…？

女2 …。

女3 マキちゃん？

女2 あ…。

女3 どうした？

女2 あれ…？こんな公園あったっけ？

女3 え、これ、学校の近くの公園だよ。

女2 そう…。

女3 大丈夫？

女2、座っている女1を見る。

女2 私ね…、大きくなったら、デザイナーになりたいかったんだ。

女1 (微笑) そうだったんだ。

女3 なつたらいいじゃん。

女2 うん…。

女3 どうしたのマキちゃん、さくらんぼ食べる？

女2 (食べて) うん、やっぱり味しないや。

女3 おいしー。

女2 美味しかったっていう記憶はあるんだけどね…。この公園も、懐かしいなあ、記憶にはないんだけど。

女3 マキちゃんがなんか、大人になっちゃったみたい。

女2 あつという間に大人になっちゃっよ。

女1 うん。

女3 やだなあ大人。

女2 なんで？

女3 だって働かんといかんし、子供も育てんといかんし。

女2 結婚したいんじゃないの、マイケルと。

女3 マイケルとは結婚したいけどまた私みたいな子供が生まれたらめんど臭いもん。

女2 まあね。

女3 そこは否定してよ。

女2 無理だ。

女3 子供の事とか考えたら悩みも尽きないしき。

女2 どんな？

女3 母乳だつて出ないしき、

女2 いや悩みが細かい。

女3 絶対そうでもない、あたし粉ミルクで育ったんだけどき、粉ミルクの匂い嗅ぐとき、

女2 ちよつとお、赤ちゃんの時の事思い出すとか言わないでよ。

女3 赤ちゃんの時の記憶なんかないよ。じゃなくて、赤ちゃん育ててる時の事思い出す。

女2 え…？

女3 うちの子き、一歳半くらいかなあ、なのにまたミルク飲んでたんだよねえ。離乳食もあげてたんだけどミルクの方が好きみたいで全滅食べないの。

女4、泣いている。

女4 わーん、わーん、

女3 はいはいよしよし、

女3、哺乳瓶を口に差し込むと大人しくなった女4。

女1 友達の子供が生まれたの？

女2 …。

女1 いいね、幼馴染。

女2 こりゃあ参ったなあ…。

女1 先越されちゃったね。

女2 違う、あんたの言ってる事 ちょっとわかった。

女1 ん？

女2 あんなシーン、あつたような気がするけど気がするだけで本当は無いもん。なんかごっちゃになつてんな。

女3 飲み過ぎじゃない？

女4 げふ…、げえー。

女3 あーほら、吐いた。

女4 べべべべ…

女2 でも居たなあ、あんな子…。もう誰かも覚えてないんだけど。

女1 懐かしい気持ちになるでしょ？

女2 うん。私の想像のシーンに居たあの子は確かに存在していて、その子は今もここかで大きくなつて

子供を育てている。なんか不思議

女1 あなたもね。

女2 え？

女1 だから私、八十のおはあちゃんだから。

女2 *ああ…。

女3 *ふうー。さてと、そろそろ今晚の宿を探しましょうかねえ…。どっこいしょと。あー、携帯電話が
んないんだった…。あーめんどうせ。

女4 ぶーぶー、ぶーぶー、

女3 ぶーぶーじゃないよ。トヨタ、

女4 よおた。

女3 クラウン、

女4 うーうー。

女3 マジエスタ。

女4 あじええた。

女3 あれは？

女4 ぶーぶー、

女3 ホンダ、

女4 おーあ、

女3 ステップワゴン。

女4 てぶおん。

女3 そうそう。

女5、やってきて、

女5 そんなの今から教えても分かんないでしょ？

女3 だって赤ちゃん言葉じゃなくてちゃんと物の名称で教えた方がいいって言ったもん、尾木ママが。

女5 尾木ママなんか所詮ママじゃないんだからダメだよ信用しちゃ。

女3 なんか私の方が詳しくなつてきちゃったもんね。

女5 あんたもう寒冢帰ったら？いつまでこんなふうらしてるつもり？

女3 仕事見つけるもん。

女5 見つからないでしょ？

女3 まあ選はなきやね。

女5 そんなね、子供抱えて仕事探なんて無理だつて。

女3 ちよつと一週間くらい預かってくれない？

女5 出来る訳ないでしょバカ！

女3 じゃあ二日。

女5 ちよつと明日から二日休みだ…。

女3 お願い！

女5 二日で仕事見つけてくるの…？

女3 うん。

女5 絶対…？

女3 うん、絶対！

女5 (ため息を吐いて) おむつどうやって替えるの？

女3 おむつは

女3、空いている椅子に座る。

女4 て。ぶおん。
女5 あれはてぶおんじゃなくて、うんと…、日産キューブ。
女4 につきさん。
女5 キューブ。
女4 だはははははは！
女5 何が可笑しいんだ。
女4 …。
女5 キューブ。
女4 だはははははは！
女5 キューブが可笑しいの？
女4 だはははははは！
女5 はあ？
女4 ぶーぶー、
女2 マイケルとは結婚しなかったんだ。
女3 うん、やめた。だってあいつなんかくせーもん。
女2 ほら臭いんじゃない。
女3 最初は良い匂いだなって思ってたんだけどとどとした瞬間ダメになった。恋は目も見えなくするけど鼻も利かなくなるんだね。
女2 今なにやってんの？
女3 今って、いつのこと？
女2 今は…
女4 えんつ！
女5 あ？ああ、そうね、パンツ。
女4 S、三五〇。
女5 あんたパンツだけは覚えが早いのね…。
女4 ぶーんぶーん、
女5 キューブ。
女4 だはははははは！

女5 何が可笑しいんだそんなに…。あー、どうしよ…。
女6、やってきて、女4の服を整えたりなんかしながら、
女6 あんた他人の子供育ててる場合じゃないんじゃないの？
女5 だってしょうがないじゃんそんなの…。
女6 そろそろ真剣に考えないと、そういう施設に預けるとか、警察に連絡するとか。
女5 うん…、
女4 ママ？
女5 ん？どうした？
女4、テレビを見ているようで
女4 でちゅー。
女5 ああ、でちゅーね。
女4 でちゅー。
女5 はいはい。
女6 あんた、ホントの親子みたいだね。
女4 でちゅー。
女5 でちゅーが見たいの？また今度。
女4 でちゅー。
女5 我慢。
女6 でちゅーって何？
女5 チェ・ジウ。
女6 ああ！チェ・ジウって言うてんの？
女4 でちゅー。
女6 え、なんで？
女5 私が最近冬ソナばつか見えたから。
女6 なんで今？

女5 ヨン様

女4 …。

女5 ヨン様は覚えななんだよね。

女4 でちゅー。

女5 でちゅーみたいになりたいんだよねえ？

女4 (うなづく)

女5 なれないよ。あんたはお母さんみたいになるんだから。

女3 ちよつと！

女4 でちゅー。

女5 キュープ。

女4 だははははは！

女6 あんたも夏に冬ソナなんか見てないでさ、

女5 そこ関係なくない？

女6 婚カツとか、してみたら？

女5 あのね、猫飼うと婚期が遅れるって言うでしょ？今の私は子供を育ててるんですから。

女6 偉そうに。あんたが仕事行ってる間誰が面倒見てると思ってるの？もう期限を決めますからね。お父さんも怒ってた。

女5 期限で？

女6 今週中に連絡なかったら警察に行くこと。

女5 今週か…

女6 もしかしたら事件に巻き込まれてるかもしれないよ？事故とか。

女5 確かに…。

女6 行って来なさいよ。

女5 警察に行ったら自動的にこの子施設とかに預けないといけないのかなあ…？

女6 わかんないけど…、だいたい保険証持ってないでしょ？

女5 ああ。

女6 病気になったら大変よ？

女5 うん…、わかった。

女4、寝ている。

女6 タオルケット持って来て。

女5 はい(渡す)。

女4 ぐへへへ…、

女6 笑ってる。

女5 きつたない笑い方するんだよね。

女6 泣いてるよりマシよ。

女5 うん。

女6 おやすみ。

女5・6 ばさー、

女6、タオルケットを広げる仕草。

女5はそのあと、女3の前に立つ。

女3は見上げて、ゆっくりとつむく。

女5は黙って、わざと離れた椅子に座る。

女6 って干したての布団やると太陽の匂いがしたよね。

女1 したした、ぶーんてね。

女6 ぶーんてやめてなんか臭そう。

女1 もわーん。

女6 もわーんもしない。そいでその布団が落ち切る前に素早く潜り込んでさあ誰かに掛けられたかのよ

うに「おやすみ」って言って

女1 布団が落ち切る前に潜り込むなんて出来る？

女6 出来るよこーやってぶわーってやって

女1 おー！鉄腕アトム。

女6 鉄腕アトムなんてやってないよ、こーやってぶわーって、

女1 行くぞー！頑張るぞー。

女6 じゃなくて、こーやって

女1 おー！

女6 もついい。

女1 ほいでほいで？

女6 あー太陽の匂い、きれいなお布団、幸せー。

女1 時々虫がついてたりね。

女6 やめてよ。

女1 カメムシ。くっさいの。

女6 カメムシなんかいません。もお、そうやって私の思い出をくっさい臭いに変換していくのやめてよ
ね。

女4 コラ、いつまで起きてるの！

女1・6 はい。

間。

女6 このお布団はカビ臭いね。布団乾燥機掛けてくれたらいいのに。

女1 贅言言わないの、こんな安宿で。

女6 私おばあちゃんになったら絶対ボケるわ。

女1 なに急に。

女6 だって几帳面だもん。几帳面な人はボケるって尾木ママが言ってた。

女1 尾木ママそんな事言わないでしょ？

女6 うん尾木ママそんな事言わない。別の人だ。

女1 可愛そう尾木ママ。

女6 ボケたら速攻老人ホームに入れられる。誰も面倒見てくれそうにないもん。

女5 しますよ、何言ってるのよ。

女6 旦那も早々に死んじゃうし、大した貯金もないから野戦病院みたいな老人ホームにたくさんのベッドが並べられてさ、こういうかび臭い布団の匂い嗅ぐとそこであなたと隣同士で寝てる時の思い出出す。

女1 え…？

女6 でもまあ八十って言ったってまだまだ元気だからさ、知らないうちに徘徊とかしだすんだけどね。

懐かしいなあ。

女1 ん？

女6 あなたはほとんど寝たきりだったけど、ここに来てから仲良くなったんだよね。

女1 八十の、おばあちゃん…、の記憶？

女6 そうそう。

女1 …。

女6 どうした？

女1 ああ、そっか…。

女6 ん？

女1 ううん。

女6 あーあー、行きたかったなあユニバーサルスタジオジャパン。

女1 フルで言うな、略せ。

女6 ユニバーサル。

女1 それだと何かもわからんし。

女6 ユニスタ。

女1 ねえ、

女6 なに？

女1 私の事知ってる？

女6 知らない。でも見た事ある顔、名前はわかんないけど。

女1 そう…。

女6 うん。

女1 (女2に) ごめん、私がスタートじゃなかったみたい。

女2 うん、いいよ。もはや頭が追いつかなくなってきた。ブルースト効果恐るべしだね。

女1 ここ修学旅行かあ、懐かしいなあ。

女4 あの頃は外出禁止が多くてね。

女1 そう言われると、そうだった気もする。

女5 大気汚染やら、

女1 よくわかんないけど。

女6 あー、太陽の匂いが懐かしい。

女1 そんな事ばつかわないでよ、泣けてくるから。

女6 懐かしいって感情はね、時間は戻らないものだっていう事を再認識する事なんだって。だから泣けてくるんだってよ。

女1 え？

女6 つまり、その想い出に特別意味は無いのね。何かがどうだったからとか、思い出深い何かがあったりとか、そんなのどうでもいいことなんですよ。

女1 ふーん、でも匂い嗅ぐと勝手に蘇って来るよね昔の事。

女6 うん、匂いというのは記憶との結び付きが一番強いからね五感の中で。

女1 なんかあんた先生みたいだね。

女6 これは、先生になった時の記憶だね。

女3、職員室にやってきた先生のように立ち上がり、

女3 おはようございます。今日の職員会議の資料なんですけど…

と、資料を渡していく。

女6 匂いから誘因される記憶って膨大な量だからさ、そこにいちいち懐かしさなんかある訳ないじゃん。

もつあの時は戻らないって事を感じる事。懐かしいって感情が産まれてくるだけなのよ。

女1 はあ。

女6 そのうち、作られた記憶ですら懐かしいって気持ちになっちゃうんだから。

女1 あーややこしい。もっいいい。懐かしいものは懐かしいの。あー、かび臭い。

女6 そのうちそういう匂いがあった事も知らない人達ばかりになってさ、太陽の匂いって言ったってなんの事やらってなるのよ。そうなった時に、元々なかった記憶が作られたら、どうなっちゃうんだろうね、私達。

女1 もっ怖い話やめて。

女6 言葉で説明しようとしてもなんて言ってもいいのかわからないじゃん匂いってさ。

女1 じゃあ私ソムリエになる。

女6 お、いいね、なりなよ。

女1 このお布団の匂いはそおですわね…干し草の、

女6 (笑) 確かにソムリエって何かって言ったたら干し草のって言うイメージあるよね。

女1 干し草の、中にある、犬の糞

女6 結局犬の糞の臭いになってるじゃん。

女1 干し草の、山に寝転ぶ、ハイジさん。

女6 ん、俳句？

女1 干し草の、

女6 もうええて干し草は。

女1 そうか、干し草って言ってもなんだかわかんなくなる時が来るって事か…。

女6 もうそうならホント分子レベルで言わんといかんくなるね。

女1 例えは？

女6 だから…、例えはにおい成分って言ったたらアンモニアでしょ？

女1 おしっこ？

女6 そうそう、だからこれはアンモニアと、

女1 あんもなかと？

女6 あんもなかと？

女1 が合わさって、

女6 合わさると…、

女1 食べ？

女6 食べ…たくはならないよ。

女1 けど？

女6 うーん、じゃあやっぱり…、

女1 興味の方が勝って？

女6 食べ…ます。

女1 すると？

女6 と…お腹が…、

女1 割れて。

女6 割れるの?!

女1 ぶわっぶわっ、ぶわっぶわっ♪

女6 てーてけてーててーててーててーててーててーててーててー

女1 結果に？

女6 コミットする。

女1 おめでどう！

女6 なんなんこれ！もう匂い関係なくなっちゃってるじゃん！

女4 こら！ホントにもう寝なさい。

女1・6 すいませーん…。

間。

女6 あんたと喋っていると全部バカバカしくなる。

女1 あんたが難しい事はつか言うから。

女4 修学旅行つてもっと他に話すことあるでしょ？

女6 女子高ですもん…。

女4 こんな修学旅行、あったかもしれないし、ないかもしれないし、

女6 そうですよ、このシーンに特別な意味はないんだとしたら、何話してもいいのよ。

女4 今はお外でお布団も干せないのが当たり前だからそんな事思ったのよ。匂いもない世界だったら、

匂い自体が懐かしい記憶

女6 その記憶だつてないかもしれないでしょ？

女4 うん。

女6 なんだ、先生の記憶か。

女4 誰の記憶とか関係ないですよ、おやすみ。

女6 おやすみなさい。

女1 ZZZ…。

女6 早い。マイペースにもほどがあるなあ。

周りで寝ている数人、咳こむ。

女6 マスクしよつと。

女3 でも、もう市販のマスク程度じゃ実はどうにもならないレベルなんです。

女2 マスクを突き抜けてくるんですか？

女3 来ますね、余裕で。

女2 はい。

女3 彼…、まあ仮にK君としましょうか、小林君の…あいやK君のオナラはなんて言うんでしょう、鼻の奥をつけてくる刺激臭なんですね。しかもこれが空気ににとまっつてなかなか消えないんです。クラスの子達は小林君の事を…ああK君の事を、オナラ星人と呼んでいます。小林君も、いやK君もそれを誇らしげに受け入れている様子なので性質が悪いんですよ。

女1 それはいじめられてるんじゃないですか？

女3 もしかしら周りはいじめているつもりなのかもしれませんが、K小林君はまったく意に介してない様子で、

女2 本人がいじめられていないと感じているならそれはいじめとは違うんじゃないんですかね？

女3 私が言っているのはいじめの問題ではなくて、K小林のオナラの事なんです。授業中、Kコバがオナラをするといちいち授業が止まるんですね。換気する為に窓を開けて、いったん廊下に避難するんですから全員。

女2 そんなにですか？

女3 そんなにです。もう私担任降りたいです。

女1 しかしオナラを我慢しろと言つのもね…

女3 あれわざとやってるんですよ。みんなが嫌がるの知ってて面白がつてやってるんですよKコバ、いやオナラ星人。

女6 それを、私に調べてほしいと？

女3 先生は生物が専門ですから、

女6 私より保健の先生に相談した方が、

女1 それより医者に診せた方が良くないですか？

女2 そうですね、腸内がどうなっているのか…、

女3 生徒にはとにかくオナラ星人Kコバのバカをオナラ星人と囃し立てるのを禁止にするよと言ってます。オナラ星人と手拍子をするよ調子に乗るんですよのアホ。

女6 それは本当にオナラ星人じゃないんですか？

女3 は？

女6 だって囃し立てると喜んで踊るんですよ？

女3 踊るなんて言っちゃダメ、調子にのって屁をこくんです。

女1 だったらやっぱりオナラ星人かもしれないですね。

女3 本当にオナラ星人だったらオナラの星からやってきたという事になりますけどそれでよろしいですか？

女2 あの、土星の衛星のタイタンは確か、メタンガスで満たされているんじゃないかなって思ってたっけ？

女1 じゃあタイタン星人ですよ！

女6 木星も確か、メタンとアンモニアが主成分だったような…

女1 めちゃくちゃ臭いですね木星。

女3 そんな冗談言っちゃダメで助けてくださいー私は真剣なんです、真剣に悩んでるんです私。この後小林のアホと小林のバカ親と面談なんですよ。

女1 オナラの事言うんですか？

女3 進路相談ですよ？聞ける訳ないじゃないですか。でも実際はオナラの事で頭がいっぱいなんですけど…

女5 よろしくお願いします。

女3 あ、小林さん、ですね。よろしくお願いします…。

女5 ほら、小林。

女4 お願いします。

女5 どうも、小林の母の、小林です。

女3 はい、お願いします。えーっと小林君なんですけれど…、えー、とりあえずこの前の模試の結果を見てくださいね、志望校の…：変更を検討された方がいいと思っんですね。

女5 ああ…

女3 今へー判定なんです、ランクをもっと二つは落とした方が、

女5 へー判定？

女3 あ、Dですね。

女5 ああ。どうする小林？

女4 模試の話なんか関係ねえよ。

女5 でももしもの結果がそうなるんだから、

女4 もしもの結果言ってもしょうがねえだろ、実際の結果がすべてなんだろ？

女5 そうねえ。あの、もしもの結果を言いだしたらきりがないので、受けさせてくださいお願いします。

女3 あの、模試です、もしも、イフのもしもではなくて、模試、

女5 へ？

女3 屁の事なんて言っちゃダメ私！

女5 どうする小林？

女4 変更なんてしません。

女3 そうですか、私としてはもう、志望校の屁をこいてみて、とにかく無闇に屁をこくのやめてもらってですね、

女5 へ？

女4 でも俺、どうしても東北大学に入りたいんで。

女3 ああ…屁こく大学ですよ。

女5 あんたが入りたいって言っても勉強しないと入れないんだから、

女3 屁こく大学っていうとやっぱり屁さちが高いですからね、

女5 へ、屁こく大学？なんですかそれ？

女3 だってほら、名前が似て来ちゃうじゃないですか。

女5 名前…？

女3 だから私としては屁こく大学よりは普通に屁こかない大学に行つた方がいいと思っんですよ。ホント迷惑なんです。

女4 じゃあ八戸大学にします。

女3 あ、もうそれは絶対ダメ。八の屁ですもんね。一回でも強烈なのにダメダメ。

女4 なんだよ一体…。

女5 東北の方で、小林が入れそうな大学ないんですか？

女3 まあ屁こかなければどこでもいいんですけどね私としては。

女5 あの、福島の方にあるって聞いたんですけど、平成大学とかどうなんです？

女3 うわ、それもう最悪じゃないですか。「屁せい」なんて小林によお言えませんか。屁はつかしますからねこいつ。

女4 それ福山だ上母さん。

女5 福山？福山って何県？

女4 広島。

女5 なんだ。

女3 どうしてそんなに東北にこだわるんですか？もう私東北って聞くと屁こくになっちゃうんでホントやめてもらいたいですよ、怒られちゃいますから東北の人に。普段はそうじゃないんですよ、名譽の為に言っておきますが、

女4 母さんを探しに行くんです。

女3 …？

女4 母さんが、東北に居るらしいんで。

女3 おかあさん…？

女4 だから別にどこだっていいんです。でも母さんが、大学はちゃんと出た方がいいって言うから。

女5 実は私、本当の母親じゃないんです。小林は友人の子供でして、幼い頃から私が育ててるんです。

女3 ああ…。

女4 東北って広いですから。探すって言ったって手がかりなんてほとんどないですから。

女5 この間、テレビで楽天の試合観てたら映ってたんです、小林の母親が、バックネット裏でメガホン持ってユニホーム着てマスコットの被り物かぶって応援してる姿を。さすがに言うのやめようかと思っただけです。

女4 別に一緒に暮らしたいとかそういう事ではなくて、会って話がしたいだけで、用が済んだら帰ってくるんで、僕にとつて母さんはこの母さんなんです。

女3 …。

女5 先生、どうしました？

女3 … (うつむく)。

女5 (立ち上がり) 何があったか知らないけど、言えない理由があったと思うし相当な苦労もあったでしょう、大変な思いもしたと思う。だけど私許さないからね。どんな理由があってもそれはそれこれは、子供置いていくなんて絶対許さないから。

女3 うん…。

女6 あの子、結局行かなかったのね警察…。

女2 みたいだね。

女4 ブー。

女5 あ、オナラした。

女4 ぐへへへ。

女5 罰金ね。

女4 オナラなんてしてまっせーん。

女5 したじゃん、あーあ女の子のくせに、はしたない。

女3 小林君…、もうオナラしていいからね。

女4 どおおー！

女5 今は飛行機に夢中みたいだね。

女4 第一輸送隊C130H、ロッキード社製。

女5 もう私も知らない名前、誰に教えてもらったの？

女4 ー、内緒。

女5 なんで内緒なんだよ。

女4 冬になるとね、

女6 冬ソナ？

女5 冬ソナはもう卒業しました。

女4 ストープから灯油の匂いがして、それがエンジン？飛行機の、戦闘機の風がぶおおーって、フェンス際、その風が灯油みたいな匂いがする、私、そこに立ってて、見るの、大きくなったら。

女5 大きくなった時の記憶なのね。

女4 うん。基地がそこら中にあるから、すぐ見える、飛行機。

女5 それは一体いつの話なんでしょうね？

女4 私が高校生になったら、行く。

女5 今がいつなのかもわからないのに。

女4 全部、匂いが懐かしい。

女6 無いんだけどね、こんなシーン。

女3 あつたらヤダよ、あんなシーン。

女2 あつてもいいよ、どんなシーンでも。

女1 うん、なんだか懐かしいからいいんじゃない？

女4 夏の匂いでしょ。

女2 窓が全開でね、

女3 ここは教室？

女6 いったらどう？

女4 きんこーんかんこーん
女5 掃除の後
女6 あれなんの匂いなの？
女1 砂？校庭の。
女6 芝生？
女2 クレヨン。小学校か。
女3 あー、牛乳、雑巾、拭いたあと。
女4 あー、最悪。
女5 粘土は？
女6 油粘土ね、
女1 プールの匂い。
女2 もう帰ろっか。
女1 裏道通って遠回りした、私。
女2 夕方になるとパン工場からパンの匂いした。
女3 あそこ掘場さんち、焼き魚
女4 どこだこれ、煮物、しょうゆの匂い。
女5 どぶ川もするよね、
女3 あーするする、
女6 もっどぶ川なんてないでしょ？
女5 田んぼ、ザリガニ。
女1 ああー。
女2 きんこーんかんこーん。
女3 通学路、工場のさ、
女1 つーん
女3 そっそっ。
女4 つーんとした臭い、
女5 息止めて走ったね。
女6 走った走った。
女1 家に帰ると家の臭い、

女2 ウチすき焼きだったわあ、
女3 いいなあ、
女4 懐かしいね。
全員 懐かしい。
女5 もう忘れちゃったけど、そんな匂い、
女6 あの匂い、もうしないけど、

溶暗。

〜終〜

【上演記録】

2015年7月9日～12日 オイスターズが送る珠玉の短編・中編集『劇玉Ⅲ』〔損保シヤパン日本興亜人形劇場ひまわりホール〕

2018年5月9日～15日 オイスターズが送る珠玉の短編・中編集『劇玉Ⅳ』〔損保シヤパン日本興亜人形劇場ひまわりホール〕

【スタッフ】

演出・舞臺美術／平塚直隆 舞臺監督／柴田頼克 照明／今津知也 音響／いちろー、田内康介

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所屬する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp